
短編 挑戦レッド

ケースケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編 挑戦レッド

【著者名】

【あらすじ】
自分が最強だと思つ、俺はシロガネ山であつて出合つ・・・

(前書き)

ポケモン替え歌聴いてたら書きたくなった、反省はしていない。

俺に敵は居なかつた・・・

向かつてくるトレーナーにはモンスター・ボール一個で全てが終わつていた。

カントーからシンオウまでのジムの全てに挑戦した、
中には強いところもあつたが、結局俺には倒すには足りなかつた。
四天王にも挑戦した、チャンピヨンにも、
初めてだつた、手持ちのポケモンを3匹削られたのは、でも俺を倒
すにはいたらなかつた。
そいつの名前は、ゴーラドといつ名前だつた。

そして、今、俺は更なる高みを目指し、シロガネ山にあつてきた。
やはり、シロガネ山の野生のポケモンは強かつた。
でも、俺には適わない。出てくるポケモンをなぎ倒して進んでいつ
た。

神聖な空気漂う空間を潛り抜け、とうとう頂上にたどり着いた。

そこには一人の男がたたずんでいた。

俺がたどり着いたと同時にその男は急に振り返り、
俺にこお言い放つた、

「・・・俺を本気にさせてくれるか？」

そうじつて、男は腰にあるモンスター・ボールを取り、カビゴンを出してきた。

良く育つたカビゴンだ、今まで見たカビゴンの中でもっともでかい。

おもしろい、

そお思つて、俺は腰にあるモンスター・ボールを取り出した。

「出る、メタグロス」

そうやって出てきた、メタグロス、これも野生とは比べ物にならな
いほど強い。

「君は・・・強いんだろう?」

男はそうじつて、それと同時に戦いが始まった。

「メタグロス、コメットパンチ」

メタグロスは手に力をため、一気にカビゴンに近づく。

そんな、俺らをあざ笑うかのよひに、レッズは言った。
「カビゴン、じしん」

急に地面が揺れ、メタグロスの足が止まる。
地が割れて、メタグロスの足を飲み込む。

「メタグロス、電磁浮遊」

そう、指示を出し、メタグロスが地面に飲み込まれるのを防ぐ、

すでにメタグロスは、HPが半分以下になつてている。

それに追い討ちをかけるように、男はカビゴンに命令した。

「ほのおのパンチ」

その言葉にカビゴンの手が発火した。
そして、メタグロスへ距離を詰める。

「メタグロス、避ける！」

しかし、宙に浮いた、メタグロスはたいした回避行動を取ることが直撃してしまつた。

氣を失つたのか、電磁浮遊が解けて、地面に倒れこむ。

「良いやつたメタグロス、戻れ」

モンスター ボールにメタグロスを戻す。

此処までとは・・・

俺のメタグロスが何も出来ずに一方的になぶられるとは・・・

俺は、懐から、もう一つのモンスター ボールを取り出す。

「いけ、カイリュー」

そういうで、出したのはドラゴンタイプのカイリュー！つなら、炎を地面もあまつきかないはずだ。

「カイリュー 電磁波」

命令に従い、カイリューは目の前に目に見えるほど電気を出し、カビゴンにぶつける。

カビゴンは体に電気を纏い、マヒ状態になる。

男は、それに対してもんのアクションもせずに、不敵に笑う。

「カビゴン、のしかかり」

その隙を見逃すほど、馬鹿じゃない、
動かない。

「カイリュー きあいパンチだ」

痺れたカビゴンに近づき、その一撃を食らわせる。
格闘技だ、効果は大きい。

カビゴンの顔が苦痛にゆがむ。

男は指してあせつた様子はない。

「カビゴン、電磁波だ」

痺れた体を動かし、電磁波を出す。

その一撃は見事に命中する。
カイリューもマヒしてしまった。

「カイリュー きあいパンチ」

その一撃で、カビゴンは戦闘不能に陥つてしまつ。

男はカビゴンをボールに戻した。

「ありがとう、カビゴン」

「いけ、ラプラス」

次に出したのは、水タイプだ。

「カイリュー 電磁波だ」 「ラプラス吹雪」

先に指示を出したのは俺だ。

しかし、カイリューは体が痺れて動くことが出来なかつた。

そして吹き荒れる吹雪。

まずい、カイリューに氷タイプの技は・・・！

思つた時には遅く、カイリューのHPはどんどん削られた。
もう、体力はそんな残つていないだろ？

「カイリュー りゅうせいぐん！」

最後にカイリューに命令を出す、

その攻撃は見事命中するが、再び相手の吹雪により、カイリューは戦闘不能に陥つた。

りゅうせいぐんを受けて尚、ラプラスの体力はまだまだありそうだ。

どれだけ育てればああなるのか、検討もつかない。
しかし俺のポケモンも負けていないと信じたい。

カイリューを自分のモンスター・ボールに戻す。

「お疲れ、カイリュー」

すると、男もラプラスをモンスター・ボールに戻した。

相手が何を出してくるのか分からぬ状態・・・

この状態弱点の少ないポケモンを出すのが定石だが・・・

「出る、バンギラス」

俺が出したのはバンギラス、こいつにはいつも助けられている。

「いけ、リザードン」

男が出したのは、リザードン、タイプの上でも此方が有利だ。

先に動いたのは男だ、

「リザードンにほんばれ」

その言葉と同時に、空は快晴になる、先ほどまで、天を映す様子は

なかつたのだが。

「バンギラス、ストーンエッジ」
「これで、リザードンは終わりだ。」

しかし、ストーンエッジは空中に逃げて、かわされてしまつ。

つち！ これだからストーンエッジは・・・

男はその様子を見て、軽く笑みを浮かべた、
「リザードンだいもんじ」

空中に飛んでいる、リザードンは地面に向かい、大きなだいもんじの炎を放つた。

岩タイプのバンギラスにだいもんじだと？

そんなの効かないに・・・

そのだいもんじは、見事バンギラスに命中し、大きく大地を焦がす。バンギラスはそれでも、体力が大きく削られた。

いまひとつ、炎であれだけ食らうとは・・・

でも、これで終わりだ

「バンギラス、ストーンヒッジだ！」

その技は、空中に飛んでいる、リザードンに命中する。

ダメージに空中から落ちてくる、リザードン、

これで、後4体。

そう思った、矢先、倒れたはずのリザードンからだいもんじが飛んできた。

つな！ あれを耐えたのか！

此方のバンギラスはもはや虫の息だ。

しかも、先ほどの一撃で、やけどを負つてしまつた。このターンでしとめなければ、死ぬのは此方だらう。

「つち！ バンギラス冷凍パンチ！」

その攻撃で、リザードンは崩れ落ちる。

しかし、同時にバンギラスもやけどのダメージで息絶えてしまう。

「戻れ、バンギラス」

これで、此方の手持ちは後3体、

あちらは、4体。

次に出すポケモンは・・・

「いけ！ ウィンディ」

基本氷が大ダメージの自分のパーティの氷対策専門だ、
かといつても、対普通戦闘が弱いというわけではない。炎タイプの
技では大いに活躍を期待できる。

「出る、ラプラス」

男が出したのは、こちらのタイプにそぐわない、水タイプだ。

こちらの不利には変わりないが、あのラプラスは、先ほど、カイリ
ューのりゅうせいぐんすでにダメージを受けている。

倒せないことはない。

「ウインディ！ 神速」

神速のスピードで先手のダメージを与える。

これで倒れてくれれば恩の子だ、

しかし、男のラプラスは虫の息だがからうじで戦えるようだ。

相手は水タイプだ、フリだが、このウインディも相当育ってきた。
多分ハイドロポンプの一撃も耐えることが出来るだろう。

そう考えた矢先、
「ラプラス、ぜつたいれいど」

そう、一撃必殺の一撃が放たれた、その一撃は、ウインディを凍りつかせ、戦闘不能に追いやつた。

想定外だ、此処に来て、一撃必殺が出るとは思いもしなかった。

「戻れ、ウインディ」
「戻れ、ラプラス」

男も瀕死のラプラスを戻した。

「俺を楽しませてくれるんじゃないのか？」

そこで、男が口を開いた。

その言葉で、一気に頭に血が上る、しかし、挑発にのつては冷静な判断を下せなくなる。

俺はその言葉を無視して、次のポケモンを繰り出した。

「出る、ガブリアス」

そう、こいつは俺の切り札、パーティの中でもっとも高い攻撃力を保持している。

男は、そのモンスターを見やり、モンスター・ボールを出した。

「行け、カメックス」

出てきたのは、またも、水タイプのポケモン、

先手必勝、

「ガブリアス！じしん」

この技は、先ほど、メタグロスが沈められた技だ、浮かぶ手段を持たない、カメックスなら、地面にはめて、一気に畳み掛ける、

想像通り、カメックスは地面に嵌り、多大なダメージを受けている、

「ガブリアス、畳み掛けるぞ」

そう命令し、ガブリアスを近づかせようとすると、

「カメックス、ハイドロカノン」

男が言うと、カメックスは向かっていくガブリアスに照準を定めた、

「ガブリアス！まち

その言葉は間に合わず、大きな水の砲台がこちらに向かって放出された。

その水流は、ガブリアスに多大なダメージを与えた。

多分体力は3／4は持つていかれただろう、

しかし、相手も、地震で弱っている、此処で畳み掛ければ！

「カメックス、アクアジェット」

「ガブリアス！ ドラゴンクローア」

相手のほうが、早かつた、相手のアクアジエットがガブリアスに命中し、またも戦闘不能に追いやられた。

「戻れガブリアス、ありがとウ」

男も、カメックスを持ち戻した。

これで、俺は後1匹、

相手は4匹。

この男まさか此処まで・・・
負けるのか？ 今まで一度も負けたことのない俺が負けるのか？

俺は、震える口を開いた。

「お前、名前は？」

「俺か、俺はレッド」

男は続けていった。

「さあ、バトルの結末を魅してくれ！ 君と俺がどっちが勝つのか！」

そういうて、レッドはモンスター・ボールを投げた、

そこから出でたのは、フシギバナ、それも平均の倍はあるだろウ、

大きさの。

俺は・・・負けない。

「出でくれ！ルカリオ」

俺の手持ちのパーティの中で、もつとも俺と付き合いが長く、もつとも強いポケモンを出す、こいつが通じなければ俺の負けだ。

「ルカリオ！ブレイズキック！」

ルカリオは、今までのポケモンの中でもつとも早い動きで、フシギバナに近寄る、

しかし、

「フシギバナ身代り」

ほのおのパンチがあたつたのは、フシギバナの身代りだった。ルカリオは、そのせいで、フシギバナを見失つてしまつ。

「フシギバナ、ソーラービーム！！」

背中に光が集められる、先ほどのリザードンの日本晴れで集約率は上がつている。

その一撃は、ルカリオの背中を捕らえる。

「フルカリオ！！」

多大なダメージを受けながらも、ルカリオは、立ち上がる。

「ルカリオ、ブレイズキックだ！」

先ほどのよつに、身代りではなく、本物の、フシギバナに攻撃は命中する。

苦痛に顔をゆがめながら、フシギバナはまだいけそうだ。

「フシギバナ、ソーラービーム」

さらにフシギバナで詰めにきた、しかし、

「ここに負けられねえ！」

「ルカリオ！ 神速だ！！」

相手の光が溜まりきる前にルカリオの攻撃が直撃した、その一撃で、フシギバナは戦闘不能に陥つた。

「戻れ、フシギバナ、良くなつた」

「君は強かつたよ、ピカチュウ、いつてくれ」

その言葉に今までレッドの肩にのつかつて居たぴかちゅうが、地面に降りる。

「こいつは、俺のパーティーで一番強い、そう、君にとつてのルカリオのような存在だ」

その言葉に、レッドは後ろを向く、

「今度はもつと本気にさせてくれよ?」
その言葉にはどこか寂しさが感じられた。

なにを言つてやがる!

もつ、終わったみたいな口して、まだ終われねえ

「ルカリオ! しん! 「遅い、かみなり!」

俺の命令はさえぎられ、ピカチュウの一瞬からだが帶電したかと思うと、

次の瞬間には、ルカリオに激しい雷が落ちた。

その一撃で、ルカリオは戦闘不能に陥つて。

そこで、俺の視界は真っ白に染まつた。

「またやつたのかい? レッド、今度はどうだった?」

後ろから物音が聞こえたと思い、その言葉の主を頭に浮かべながら

振り返る。

「グリーンか・・・今回は白熱したよ、もう少し修練すれば、俺を本気にさせてくれるかもしない」

その言葉にはどこか嬉しさがこじみ出ている。

「へえ君がそこまで言つ相手か・・・僕も一度やつてみたいかも知れない」

グリーンと呼ばれる男は、興味深げに倒れた男を見ていた。

レッドは振り返つてまた下に向かつて歩き出した。

「お前とはいひ勝負だよ、そいつ、麓のポケモンセンターに連れてつてやつて」

そう言い残し、レッドは、洞窟の奥に姿が消えていった。

「レッド・・・君を満足させるトレーナーに会えるのだろうか・・・

「

田が覚めると、シロガネ山の麓のポケモンセンターに居た。

自分の両手を見つめながらつぶやく。

「俺は負けたのか・・・レッド・・・か、強いな

もう一回鍛えなおすか、最初の町から・・・

まつてうよーーー、俺はいつかお前に追いついてやるーーー。

(後書き)

レジドにこよね^ ^
原点にして頂点のレジドかっこいいw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0555n/>

短編 挑戦レッド

2010年10月9日04時18分発行